

【岐阜】4本目の柱として高齢者医療に取り組み、緩和ケア病棟を開設-松久卓・国立病院機構長良医療センター院長に聞く◆Vol.2

2023年4月14日（金）配信 m3.com地域版

国立病院機構長良医療センターの松久卓院長は、院長就任と同時に高齢者医療に取り組み、2023年1月10日に緩和ケア病棟「やすらぎ病棟」を開設した。「やすらぎ病棟」は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、予定より約1年半遅れてオープンした。「やすらぎ病棟」開設の背景や特徴、オープンに向けて苦労したことなどについて松久氏に聞いた。（2023年3月7日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



国立病院機構長良医療センター院長・松久卓氏

——2023年1月10日に緩和ケア病棟「やすらぎ病棟」を開設しました。開設の背景を教えてください。

当センターは、産科医集約の影響で2020年に産科周産期医療をやめました。そのため、新たな事業を始める必要があります。私は高齢者医療への取り組みを考えました。この地域は緩和ケア病棟が比較的少なく、岐阜市の周辺では、清流病院（岐阜市）、JA岐阜厚生連中濃厚生病院（関市）、岐北厚生病院（山県市）、東海中央病院（各務原市）の4病院しかありません。今、半分の人が一生涯の中でがんになりますし、26.5%（「2021年人口動態統計月報年計（概数）の概況」厚生労働省）の人ががんで亡くなりますから、これからは緩和ケア病棟が必要だと思って始めました。



国立病院機構長良医療センター「やすらぎ病棟」開棟式（中央が松久卓院長）

——開設した緩和ケア病棟の特徴は。

当院の緩和ケア病棟の理念は、「あなたらしく生きるために寄り添い支えます」です。その人の最期をその人らしく家族と一緒にゆったりと穏やかに過ごしてもらおうということです。普通の病棟とは異なり、少しホテル仕様という感じで、今まで4人で使用していた病室を、1人で使うようにしました。そのような病室（18床）を作り、人生の最期を、家族と一緒に迎えてもらえるようにしました。また、デイルームでは、ゆったりとくつろいでいただけるようにソファなどを設け、読書をしたり、お見舞いの方々とおしゃべりをしたり、さまざまな時間を過ごせるように工夫しました。

岐阜には金華山があり、岐阜城があります。当院はその北側にあり、南の窓から金華山と岐阜城が見えます。岐阜で生まれた人は、だいたい金華山と岐阜城を見ると岐阜に戻ってきたと思うのですが、そういう景色を見ながら過ごせます。



国立病院機構長良医療センター「やすらぎ病棟」の病室



国立病院機構長良医療センター「やすらぎ病棟」のデイルーム

——「やすらぎ病棟」をオープンするにあたって、大変だったことは。

やはりCOVID-19の影響です。最初、2020年に私が院長に就任した時、現在COVID-19で使用している病棟を緩和ケア病棟にする予定でした。そこをCOVID-19専用病棟として使わないといけなくなり、1～2年で収まると思っていたら、いつまでたっても収まる気配がなく、仕方がないので小児科病棟を一般病棟に移動し、今までの小児科病棟を緩和ケア病棟にしました。COVID-19が早く収束すれば、もっと早く開設できたのですが、COVID-19の影響で3年たってしまいました。

——緩和ケア病棟の医師や看護師は新たに採用したのですか。

当センターには肺がんを診る医師はまずまずいますが、消化器がんを診る医師はいませんでした。そのため、緩和ケア病棟を担当していただくために、2020年に消化器内科部長の加藤則廣先生に来ていただきました。

それ以外の緩和ケア病棟のスタッフは、今までも当センターにいたスタッフが担当しています。医師2人は、以前、私が入った東海中央病院（各務原市）へ約半年間勉強に行きました。また、看護師は、愛知県の国立病院機構豊橋医療センターに緩和ケア病棟があるので、そこへ勉強に行きました。

当センターには重症心身障がい者病棟があります。その病棟を担当している看護師は、患者さんに寄り添いながら、一緒に過ごしているため、緩和ケアに向いています。患者さんに寄り添い、患者さんの苦痛や気持ちも分かります。そのため、新たに緩和ケアのスタッフを採用しなくても、重症心身障がい者を診ていた看護師たちが十分対応できます。

——2023年1月にオープンした緩和ケア病棟の稼働状況は。

2023年2月の平均患者数は約9人です。緩和ケア病床は18床ですので、だいたい半分ぐらいです。今後、8割ぐらいの稼働率にしたいと思っていますが、初めて1カ月ちょっとですので、これからだと思っています。

入院患者や家族からの反応は、ここに入って良かったとか、看護師さんが優しくしてくれているとか、広々としていいとか、おおむね好評です。

——医師、看護師の採用はどのような状況ですか。

呼吸器外科は京都大学から3人来てもらっていますし、呼吸器内科も6人いますので、呼吸器内科・外科、小児科の医師は充実しています。しかし、それ以外の診療科の医師が手薄です。当センターの多くは岐阜大学からの派遣医師で、それ以外に個人的に採用する医師もいますが、なかなか医師の採用が難しいです。岐阜大学にお願いしていますが、すぐに派遣してもらえない状況です。本来、あと10人ぐらいいてもいい病院なのですが、十分な数の医師を採用できておらず、医師の採用に関してはまだ課題を抱えています。一方、看護師は、国立病院機構で採用しているので、予定通りの採用はできています。

——医師の採用に向けて工夫していることは。

私が、一番注力していることはイメージアップです。どうしても国立病院機構は「固い」というイメージがありますので、このようなインタビューに気軽に応じるとか病院のホームページを新しくするなどイメージアップをして、多くの医師や看護師さんに来てもらいたいと思っています（笑）。

——国立病院機構長良医療センターにおける医師の働き方改への取り組みは。

当センターは時間外労働の多い医師が数人いますが、もともと、急患がどんどん来るような病院ではないので、全体的には基準を満たしている人がほとんどです。数人の医師の時間外労働を減らすようにタスクシェアする方法を考えています。

——今後、国立病院機構長良医療センターはどのような病院を目指しますか。

患者さんからも、職員からも、いつまでもなくてはならない病院であり続けることが一番の目標です。そのためには、今、地域の人たちが求めている医療を、地道に提供していくことが大切だと思っています。その一つが高齢者医療です。岐阜市はそれほど高齢化率が高くないですが、岐阜市の周辺は高齢化率が高くなっています。日本全体が高齢化していますので、やはり高齢者医療が大切です。

◆松久 卓（まつひさ・たかし）氏

1985年岡山大学医学部卒業、同年岡山大学医学部附属病院。1991年香川県立中央病院、1993年住友別子病院。1995年岐阜大学医学部附属病院。1998年松波病院。2005年羽島市民病院。2008年東海中央病院勤務、2013年同院医務局長、2014年同院副院長を経て、2020年独立行政法人国立病院機構長良医療センター院長に就任（現職）。

【取材・文＝紅 義朗（写真は病院提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

